

## 論壇

## 地方公立大学の小さなチャレンジ

## —食農環境をトータルに体得し創造的人生をめざす者を育てる「創造農学科」新設—

福井県立大学長  
進士五十八

## はじめに

地方の大学も結構忙しい。福井県は今春知事選があつて、新しく選ばれた杉本知事は、前西川知事のマニフェスト方式を止めて、県民総参加を標榜、2040年目標の「長期ビジョン」を策定することに。私の大学は県立大学で、設置者は知事、就任直後のオープンキャンパスにも出席され、昨年来大学ぐるみで策定した「公立大学の中期計画」(6ヵ年計画)を踏まえて、その骨子を知事自身の言葉として講堂いっぱいの高校生や保護者にアピールされ、またその実現に向け全面的に支援すると発言された。学長としては誠に有難いが、その実現への催促とも受けとめプレッシャーを感じたところでもある。

ところで本稿では、その中期計画の目標の具体化第一号として2020年4月に開設する生物資源学部「創造農学科」についてその基本思想を述べたいと思う。すでに龍谷大学農学部にはじまり、大政先生の高崎健康福祉大学農学部生物生産学科、生源寺先生の福島大学の食農学類、また本学と同じ来春スタートの摂南大学農学部など次々と農学系の増設が続くなか、わずか25名定員(編入枠としてプラス5名)の新学科などその影響は微々たるものだろうが、約半世紀、東京農業大学に身を置きながら、しかも造園学・環境学といった農学では傍流からの斜視的発想を綴らせてもらおうかと思う。

## 1. パックンと、トランプか花札か

先ずはその前段。前述の「長期ビジョン懇談会」は38名もの委員であり、後期高齢者の進士では2040年目標にはとても責任は果せないとい固辞するも、結局、懇談会の座長を引き受けざるを得ず、近い将来の福井県庁をリードするであろう若手スタッフに檄をとばして楽しんでいる。

県民参加型のビジョン策定ではイベントも重要ということで、私も講演会のトップバッターとして「世界文明と福井ふるさと文化の共生」をおしゃべりした。北陸新幹線の金沢から敦賀への延伸工事が着々進むなか、文明路線だけに関心が集まることアンバランス、県土の保全と県民のアイデンティティへの関心も重要だと訴えたかったのだ。

そしてまた台風19号の猛威の翌日、ハーバード大学出身のパックンことパトリック・ハーラン氏とTV公開対談というのにつきあった。彼とは初対面だが、トランプ大統領が大嫌いだ

と聞いていたので、今春 NHK ラジオ深夜便で「トランプと花札」と題して 40 分ほど話したことを紹介。私の言い分は「トランプは、キング・クイーンなど権力的性格のカードゲーム」で、ハートやスペードなど士農工商の身分制度を下敷にしたもの。これに対して「日本の花札は、12 か月花鳥風月の季節変化と多彩な動植物での生物多様性、そして花見、月見に重陽の節句といった自然共生文化を象徴する」もので実に環境の世紀にふさわしいといったような話題を広げて仲良くした。本番が終わってからも、彼は日本の教育システムなどへの疑問を呈しはじめた。

たとえば、漢文教育は必要か？ 漢字の書き順が何故そんなに大切か？ 等々。やっぱりアメリカ的合理主義の発想だなあと私は感じながらも熱っぽく語る姿にタレントらしからぬ真面目な人間性を感じた。パクンいわく、漢文は返り点や一、二の読み方のルールだけ教えれば足りる。パクンいわく、習字の授業で書き順など細かくチェックするが、完成形がしっかりすればそれでいい、と。

漢詩の味わいには韻が大切で、吟詠のように声に出して読み、よくわからなくても子どもの頃の論語読みトレーニングが、詩に親しみ、人間の生き方を自然に学ぶことも意味がある等と柔かく指摘はしておいたがわかってくれたかどうか。子どもの頃、疎開先の福井県の小学校で書道の特訓を受けた私は、書き順、トメ、ハネを手とり足とりで教わったからこそ、自然の流れで書かれた文字の美しさは究極、アートに親しむ感性をも養うものだと言言できる、とも言いたかったが、これこそ国民性、民族文化など異文化理解の困難さの一例かとおとなしく矛を収めた。ともあれ私の心にひそむことは、或る種の欧米型近代合理主義への疑問？ というか、限界！ というかということである。

## 2. 大都市の私立大学と地方の公立大学のちがい

1944 年京都に生まれた私は、福井に疎開。小学校時代をすごした懐しの第二のふるさと福井の県立大学長を委嘱されて 2016 年 4 月から福井暮らしを始めた。

15、6 年もの大学執行部の経験で大学運営に自信はあるが、公立大学は初めて。最初に首都圏と地方の立地や社会経済環境のちがい、私立大学と公立大学のちがい、そして大学の規模によるちがいを実感。改めて公立大学の役割とか使命とか、この大学運営はいかにすすめるべきか、を真剣に考えることになった。

就任後の半年目に私の考えを学内に示した。第一は、最も強く認識すべきは公立大学のミッションで、結論は「福井県の持続可能性を支える大学であること」。第二に、その具体的取組方針を「オープン・ユニバーシティ構想」(2016 年 10 月)として提示した。

その内容と成果は、①44 ヘクタールに及ぶキャンパスは「県民のにわ」であり、県民誰もが訪れて、春はサクラ、秋は果実を楽しむ名所にする。そのために毎年新入生や地域の幼稚園児を混じえて記念植樹を続けている。又、地域の人々に学食を利用してもらえよう「県大レストラン」に改造などし、誰でもウェルカムとした。②「県民の学び」の場と機会の提供。社会人がキャンパスに共存することで学生の異年齢コミュニケーション能力を高めるこ

とになる。公立大学は県民が主要なステークホルダーでもあるので、大学の知的資源は地域産業を支える人材を輩出する学生教育機能にあるのは当然であるが、幼児からリタイアメントの高齢者まで県民の生涯学習をサポートするものでもなければならない。従って、幅広い内容の公開講座を充実したり、聴講生や科目等履修生として、さらには社会人大学院生を積極的に受入れるべきとした。そのため聴講料などの大幅値下げを実行、聴講者が大幅に増加したし、社会人ドクターを毎年輩出するようにもなった。図書館においても、教員の近刊紹介を兼ねて「県大ライブラリーカフェ」を随時開いて無料のサロンを開いている。③「県内諸団体や県民とのネットワーキング」の強化。県庁各部署はもとより、商工会議所、経済同友会、農業団体などと、また、特に県の試験場などとその研究職員とのネットワークにより、福井県民の教育力・指導力・助言力を大学と連結することにより、県立大学の実学的教育力アップにつなげたい。そのためにあえて「地域連携本部」の看板を掲げ、大学はそうしたネットワーキングのプラットフォームであるべきことを標榜。大学と基礎自治体との協力協定も順次すすめている。大学案内に掲げた学生に向けてのスローガンは「福井県のすべてがキャンパス・福井県民のすべてが先生」である。

私の頭では、大都市の私大は大学間競争におけるサバイバルと大学自体の持続可能性の追求に力点を置かざるを得ないが、地方の公立大は私が「オープン・ユニバーシティ構想」を打ち出したように、厳しい人口減少下での地方創生に向け本気で取り組むことなど大学を挙げた地域貢献思想に徹することになる。

### 3. 福井県立大学の中期計画、第一弾「創造農学科」の増設

福井農業短大に根っこをもつ本学だが、四大の創立からは四半世紀しかたっていない。現在、経済・生物資源・海洋生物資源・看護福祉の4学部、これにプラスして1学部以上の教員数を誇る学術教養センターの実質5学部、他に地域経済、恐竜学2研究所で学生総数1,800名が現状である。

私が学長に就任してからは、コンパクト大学のメリットを生かしてファカルティメンバー、スタッフメンバー全員による「全学ミーティング」を開いているが、この会を通じて丸一年間議論し、2019年4月を初年度とする公立大学法人の中期計画を策定した。こうして1学部2学科のバランスある学びを提供でき、2研究所については教育機能の充実を図り学生定員の増強を計る等、ボトムアップで決定してきた。

その第一弾が生物資源学部に「創造農学科」を新設して、既設の農芸化学系バイオサイエンス研究に比重を置いた生物資源学科と2学科制にすることである。新設の創造農学科は県内の農園芸産業現場における創造的人材を強化すること、アグリビジネスから福祉・環境など幅広の体験と知識をもつベンチャー精神とリーダーシップを発揮するような行動的卒業生の輩出を目的に構想し文科省の事前相談に臨んだ。以下は、文科省に提出した「設置計画の概要」の抜粋である。公立大学の置かれた状況から説き起し、この学科での学び、人材育成の目標などを整理し了承を得た。

● 創造農学科の目的および育成する人材像（文部科学省への設置計画の概要の一部）

福井県立大学は公立大学の使命に「福井の県土とふるさと社会の持続可能性を支える！」を掲げている。県土の基盤である農業農村は、急激な人口減と高齢化でマンパワーの強化が強く求められている。既設生物資源学科は生命科学と技術に関する研究成果と企業・研究所等へのテクニカル・スペシャリストの輩出に大きな成果を挙げた。これに加えて地域社会の持続可能性に寄与できる実地的で創造的なゼネラリスト育成をめざす新学科を設置したい。

新学科の目的は、ふるさとの食文化や食と健康を契機とし、その大本である「農」の総合知を修得し、動植物から微生物の発酵にいたる技と心を体得し、農と自然環境の持続的保全への行動力をも身に付けた人材育成にある。

ところで戦後日本の農学教育は対象と方法を限定し分化することで高度化或いは工業化を図ってきたが、新学科はこれとは異なり総合的で創造的実践力が身に付くよう教育方法と体制を工夫している。

本学が県立大学であることから、県の農業試験場等のフィールド、研究員などの実務教育力、さらに全県に展開する（前身を含めて百有余年にわたる）卒業生をはじめ民間経営の農牧場の場と講師陣を活用する。新品種の創出など、研究はもちろん、学部基幹の共通講義による専門科目で基礎力を学ぶことはもとより、実務経験をもつ教授陣のコーディネートにより全県キャンパス化、地域の教育力の活用を図り、さらには卒業生の全県ネットワークによる地域の創造的活性化をも目指している。

本学科は、

- ①食用作物、園芸作物、飼料作物、畜産など農業生産に関する広範な実践技術の体得
- ②食農環境関連業務の経営戦略、管理、開発、マーケティング等の経営手法の学修
- ③農林業と自然環境の共生と保全に関する学と術の体系的な修得

を通じて、ふるさとを元気にできる起業家精神を持ち、地域社会の維持発展を担う食・農・環境のゼネラリストを育成する。

卒業後の進路は、農業物生産や食品会社など「食」と「農」に関する生産・加工販売や農業ビジネス分野、種苗や農業資材開発研究の分野、環境アセスメントなど「環境」保全に関連する分野、自治体職員や教員など政策立案・教育指導の分野を想定している。（以下略）

#### 4. 福井県立大学「創造農学科」のチャレンジ

世界の大学ランキングのトップをめざす大学。建学の理念に基づく特定専門業界の担い手教育かユニークで存在感のある人格陶冶をめざす大学。そして地方の公立大学のように厳しい人口減の下での地方の活性化と持続可能性を支える教育力が期待されている大学等々。これからの大学界は、それぞれの立ち位置によって多様な展開を余儀なくされていると私は考える。

振り返ってみれば、新制大学の発足以降日本の大学は各々個別の歴史は語るものの、大学

のあり方については皆横並びでほぼ均質化していったと思える。国の高等教育政策としても、各大学自体がおこなう大学運営についてもほぼ右へ倣へであって、そのことに大学人自身も特に疑問を持たなかったように思う。政府や財界の希望に応じて微調整しつつも大学進学率の伸びなどもあって根本からの問い直しをすることもなく、広報戦略の差別化にエネルギーが向うくらいであった。

日本の大学数は、764 大学、2307 学部、5146 学科である（平成 29 年度）。一部の大学を除く大多数の大学における教育目的は、決して研究者養成ということではないはずである。もちろん卒業論文を単位としている。しかしそれは学生諸君の物の見方考え方を深めるためのトレーニングの一方法としてのものである。特定の研究テーマを決め、課題解決への思考プロセスを論理的かつデータにもとづく客観的分析法や判断法を学ばせようということだ。

大学進学率が高まり、全入時代を迎える現在、多くの大学生は、自分が学びたい専門分野を的確に把握しているとは言い難い。若者がよく言う「自分さがし」に近く、漠然と自分が興味をもって取り組めそうな対象とテーマをさがしているといったところではなかろうか。もちろん、大学入学以前にかなり狭い範囲に絞って研究テーマを決めている者も専門分野によってはいるだろうし、世界ランキングの上位を狙ういわゆる難関大学には、そうした学生が集まるだろうが、多くの普通の大学ではそうではない。

そうした現状を前提とすると、旧制大学の講座制はもちろんのこと、現行の新制大学における学科や研究室の組織立て、すなわち学部・学科・研究室・研究論文テーマへと順次細分化をすすめてゆく教育法や研究システムは学生のニーズとはミスマッチだといってもいいかもしれない。現行のシステムは旧制以来の伝統で研究者養成が基軸で、完全に学界で評価されるオリジナリティを重視する研究論文生産に最適な研究者養成システムといってもよい。

それはそれでよいとしても、普通の大学における運営との関連での課題は、一般的にはこうした研究体制を下敷にしてカリキュラムなど教育体制も構成されるということだ。当然ながらこれを踏まえて教員人事なども構築され、これまた当然のことながら狭い専門の対象と方法を踏まえた研究論文の質や数が教員採用の前提となっているということである。新設の創造農学科の学生選抜、カリキュラム、実験実習、教育方法、講師陣のすべてについて、その運営方法について私たちは新学科の担い手コアメンバーと 1 年間ミーティングを重ねた。こうして文科省事前相談の設置計画概要の前ページ下線部 2 か所の新方式を結論した。

以上細々述べてきたのは、大学側もこれまでのスタイルをただ継続するだけでなく、学生諸君らの学びに根本から対応するような工夫と変革、舵を切ることが求められているのではないか、ということである。

たとえば、元々農家の後継者を受け入れていた時代の農学系大学と、現在の状況は大きくちがう。農業農村の現場体験や現場感覚、問題意識を殆ど持ち合わせていないか、知っているのは上辺だけで、今や農家・非農家を問わず偏差値とのマッチングで大学選びがなされているのである。

ただ一方で都市生活にどっぷりつかっている都会っ子、もちろん非農家の若者たちの中に

多数派とはいえなくても一定数が、たとえば食の安全安心に、また農家・農村の田園美や居住環境や働き方に自らの新世界を見いだしたり、反都市的衝動から里地里山里湖の環境保全のためのボランティア活動を体験しその持続性に生き甲斐を見いだそうとする等の芽生えもそこそこに惹き起こされつつある。

希望的観測ながら、現代っ子であっても「食と農と環境」の重要性と、それをトータルに体験する悦びとライフスタイルを希求することで、主体的かつ自覚的に自らの人生を拓きたいとの願望をもつ者は増えていると思う。少なくとも、世間の大勢に順って無難に生きるサラリーマンとはちがう自分らしい生き方をしたいと願うアクティブな若者は必ずいるはずだ。

だからこそそのためには、画一的な管理社会である現代都市社会の対極にある「農」のもつ多様な魅力、自らの思いのままに自決できる「農」の生産と生活の自由度、何よりも動植物や微生物を資源に、その生命感あふれる「食」と「農」と「環境」をつないで自らの感性を十二分に発揮して創造的に生きることの意義を私たち自身が自信をもって発信しなければならないし、殆んどのことに未体験の若者たちに対しその魅力を自ら体験することで自ら選択できるまでに徹底的に楽しく体験できるフィールドを提供しなければならない。福井県立大学創造農学科はそのことにチャレンジしようとしているのでご理解いただきたい。